頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム
—世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化—
報告書

非古典論理の観点からの分析アジア哲学の展開

派 遣 者：大西　琢朗
派遣期間：2016 年 4 月 1 日～9 月 27 日
派 遣 先：シンガポール国立大学(シンガポール)

キーワード：分析アジア哲学、非古典論理、インド論理学、ジャイナ教

1. 研究課題について

「分析アジア哲学の構築」にかんする国際共同研究への寄与をなすのが本派遣の目標である。分析アジア哲学とは，現代の分析哲学の視点や非古典論理の道具立てによって，仏教や儒教などのアジア思想を捉え直そうという新しいトレンドである。派遣者は，アジア思想の文献読解作業とそれを分析する現代的・理論的ツールの開発・習得に従事する。具体的には，インド哲学・論理学の根本的な論理原理のひとつである「テトラレンマ (四句否定)」にかんして，とくにそこに現れる矛盾および否定の概念を適切に解釈するための形式論理的ツールの開発を目指す。

2. 派遣の内容

派遣期間の前半 (2015 年 10 月 1 日から 2016 年 3 月 31 日まで) に引き続き、シンガポール国立大学 (NUS) に客員研究員として滞在し、研究を行なった。4 月に南洋理工大学(Nanyang Technology University, NTU)のセミナーで発表を行い、8 月には韓国・ソウル大学で行われた The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA)におけるワークショップ A Frontier of Analytic Asian Philosophy において口頭発表を行なった。研究内容にかんしては、しばしばテトラレンマと対比させられる、ジャイナ教の論理的原理である「Sevenfold predication」に注目し、それについての現代論理学の観点からの解釈とテトラレンマとの比較を行なった。

NTU での発表のポスター

CCPEA 会場

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

前半半年間の滞在ですでにシンガポールでの日常生活には慣れてしまっており、季節の変化もないため、単調な日々が続いた。季節の代わりというわけでもないだろうが、月替わりのように訪れるさまざまなイベントはどれも盛大に行われる。Vesak Day (5 月、仏教の祝日)、Hari Raya Puasa (7 月、ラマダン明けの祝日)、独立記念日(8 月)、中秋節(9 月)などである。10 月の Deepavali (ヒンドゥー教の祝日)やクリスマスを含めると、国を形成する各宗教・民族の文化の雰囲気をひととおり体験することができる。

この間もっとも国全体が沸いたのが、リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピックでのシンガポール選手団の活躍だった。とくに、シンガポールに史上初の金メダルをもたらしたジョセフ・スクーリング選手はマスコミや SNS での話題を独占し、帰国してすぐ熱狂的な祝勝パレードが開かれた。

こうしたナショナル・プライドを高揚させるイベントの一方で、隣国のマレーシア、インドネシアではいくつかのテロが起こり、シンガポールを標的としたテロ計画(とされるもの)も摘発されるなど、国是である多民族・多文化の共存を揺るがすようなできごとも見受けられた。建国 50 周年(2015 年)のお祭りムードが終わり、経済も好調とは言い難いなかで、国のあり方の再検討を求める雰囲気が高まってきているように思われた。

4. 目的の達成度や反省点

派遣期間前半に投稿した論文がぶじ採択・出版されたほか、NTU での発表をもとに論文を一本完成させることができた(未投稿)。また、ジャイナ教という自分にとっては新しいトピックに取り組み、学会発表という形にできたことは一定の成果と捉えてよいと考えている。その発表では、sevenfold predication を bilattice という概念を用いて現代的に再解釈した。この結果はこれまでの研究と併せ、sevenfold predication とテトラレンマを共通の枠組みで比較対照するための道を開くものである。

人的交流の面では、NUS や NTU の多くの研究者と親しくなることができたが、今期はその大部分が大学の学期休みにあたっており、ほとんどのメンバーが国外に出たため、あまり頻繁に交流することはできなかった。自分も韓国へは学会に出かけることはできたが、もっと国外での活動を前もって計画しておくべきであった。

マリーナベイサンズから見る夜景

5. 今後の派遣における課題と目標

今期でシンガポール国立大学への派遣は終了した。今後は、今回の派遣の研究成果と得られた人的ネットワークを活かして、論文などへのアウトプットを本格化させる。具体的には、CCPEA でのワーク

ショップをオーガナイズした出口康夫教授や共同発表したメンバーとともに、学術雑誌での特集号編集や論文集の出版を企画しており、それらへの論文投稿、掲載が当面の目標となる。研究の内容面で言えば、テトラレンマや sevenfold predication を再構成できる形式論理的なツールは整備できたものの、それらのツールの使用を動機づける哲学的な議論はまだ不十分である。上に挙げたメンバーと議論しつつ、形式論理と哲学のバランスのとれた枠組みの構築を目指したい。